

ヒラメは何時・何処で放流すれば良いのか？

栽培・深層水課
研究員 町 敬介

1 背景・ねらい

現在富山県では、栽培漁業の一環として、8月ごろに約20万尾のヒラメ種苗を放流している。平成13年度～19年度に放流したヒラメ種苗の回収率は、平均3.44%であったが、この回収率をさらに向上させるためには、種苗の生育に適切な環境に放流することが重要と考えられる。

そこで水産研究所では、ヒラメの放流適期・適地調査として、県下地先におけるヒラメ稚魚の肥満度（放流適性の指標）や餌環境などの調査を行うことによって、ヒラメ種苗をいつ・どこで放流すれば良いかについて検討を行ったので、その結果について報告する。

2 成果の概要

ヒラメ稚魚の肥満度は、胃内容物中に餌生物のアミ亜科が多いと高かったことから、ヒラメ種苗の放流には、環境中のアミ亜科量が重要であることが分かった（図1）。

そこで、県下各地先のアミ亜科量を調査し、ヒラメ種苗の放流適期、放流適地について検討を行った。

その結果、放流時期は、県西部では6月中旬から7月上旬、県中部及び県東部では6月中旬から7月下旬が良いと考えられた（図2～4）。

また、放流場所は、水深5m～10mの沖合の場合は、海底が砂地であれば、一様に良いと考えられた。しかし、水深1m以浅では沖合と異なり、塩分の低い地先ではアミ亜科が少ない場合が多いこと、潜堤等によって海水の交換が悪い地先にはアミ亜科が少ないことが明らかとなったことから、海岸での放流の場合には、高塩分下の地先で、海水の交換が良い場所が、ヒラメ種苗の放流に適していると判断された（図5,6）。

3 成果の活用面・留意点

本調査で得られた結果は、現在行われているヒラメ種苗の放流時期の再検討に資するものであり、この結果を放流に反映することで、回収率の向上が期待できる。

今後は、実際の放流時に放流場所において、餌生物量を中心に調査し、放流時のデータを蓄積させることで、最終的には適切な放流が回収率に反映されているかを評価していくことが必要である。

4 問い合わせ先

富山県農林水産総合技術センター水産研究所 栽培・深層水課
担当：町 敬介
TEL 076-475-0036

(参考) 具体的データ

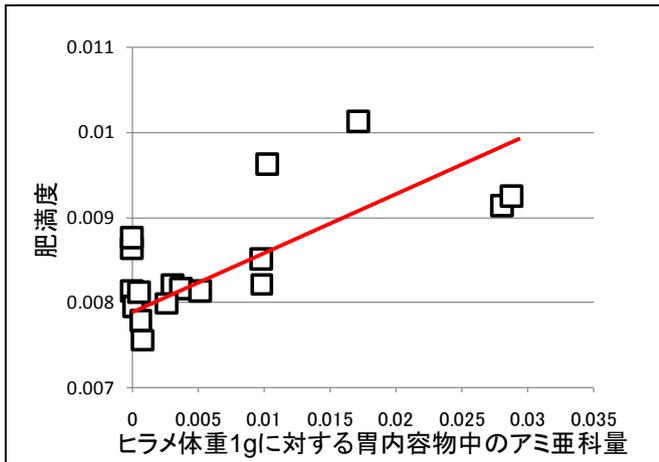


図1 胃内容物中のアミ亜科量とヒラメ稚魚の肥満度の関係

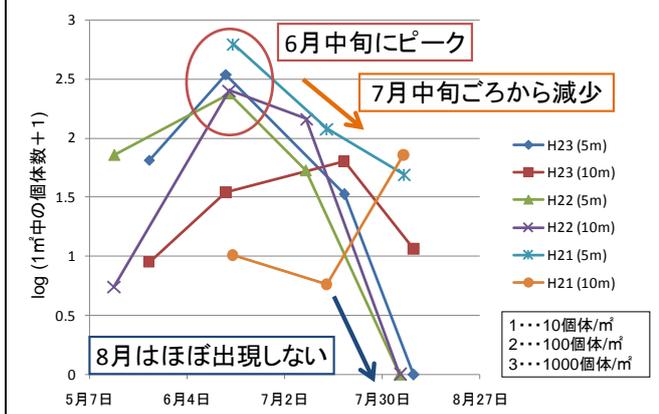


図2 平成21～23年における県西部のアミ亜科量の推移

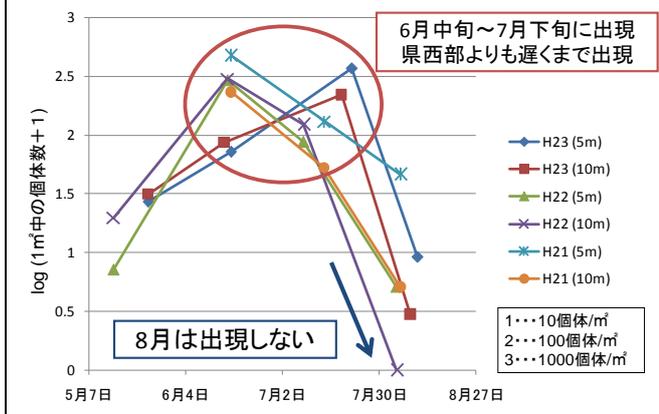


図3 平成21～23年における県中部のアミ亜科量の推移

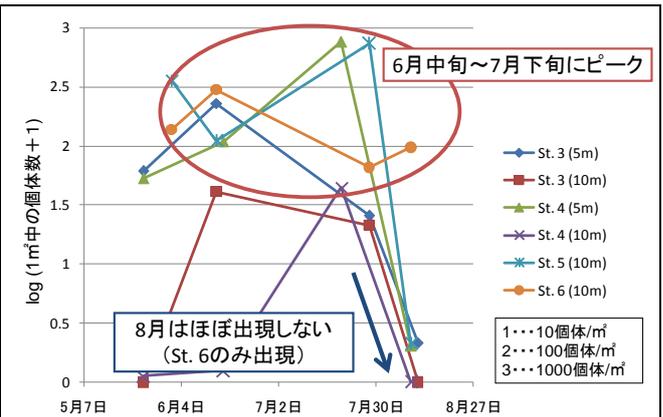


図4 平成23年における県東部のアミ亜科量の推移

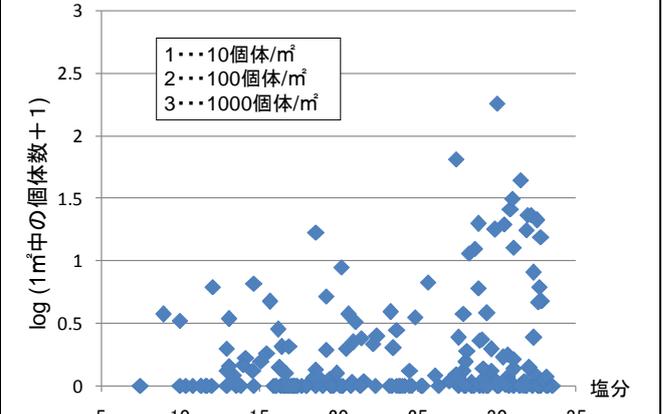


図5 アミ亜科量と塩分の関係

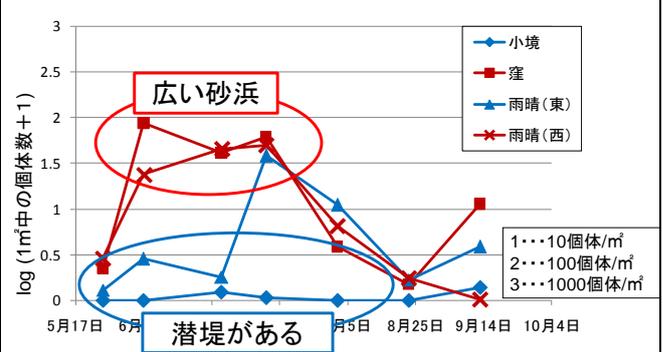


図6 アミ亜科量と地形の関係